

「三位一体の神によって届けられる愛」

(ヨハネによる福音書 3:1-16)

「神はご自分の独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

これ以上に語るべきことがあるでしょうか。神は、この世の誰一人、愛に飢え、不正のなかで死んでいくことを望んでおられません。

旧約のはじめ、神と人は共に顔と顔を合わせて暮らしていました。しかし、食べてはいけないと言われた木の実を食べた人は、神から離れてしまいます。それでも、神は人を愛します。預言者を通して、律法によって、人にその愛を伝え、どんなに人が酷いことをして神から離れても、赦し、ご自分のところに戻るように導かれます。時に人は、これからは神に従いますと誓ったりしますが…すぐに人は、預言者を殺し、自分たちの都合のいいように律法を骨抜きにし、神から離れるのです。そうしているうちに、人は神がどこにいるのかわからなくなってしまいます。まして、神が自分を愛しているということなど、わからなくなってしまう。それでも人はわがままですから、天国に行きたいとか、神に愛されたい、神に近づきたいと望むのです。でも、どうしたら良いのか分からない。そこで、律法を文字通り守ることに専心します。けれども、神の愛を知らずして、律法の「心」はわかりません。律法に込められた神の愛を知らないのに、律法を正しく守ることなどできないのです。

愛無き律法は、人を裁く道具になります。結果として、人は律法の名のもとに裁き合うようになり、不正がはびこります。弱くされた者は救われず、正しい人でさえも、律法の名のもとに排除される世界になってしまうのです。しかし、人をどこまでも愛される神は、そんな人間のためにいよいよ、愛する独り子をこの世に遣わしてくださいました。

この御子を通して、人は生き方を知ります。神がどのような方かを知ります。何よりも、神の愛を知るのです。その愛が示された場所こそ、十字架の上です。愛する人のためにご自分の命をささげる主イエスの姿を通して、わたしたちは神がこれほどまでに人を愛してくださっていることを知るのです。

しかし、十字架の上でこそ神の愛が示されたということなど、どうして信じられるでしょうか。主イエスが言われるように、水と霊によって、新しい命をいただかなければ、信じることはできません。神から離れてしまう命から、神の愛を知る命に変えられること。神の愛を知る命こそ、霊による命です。水は霊の象徴です。霊の水で洗われるとき、わたしたちは霊の命をいただき、主イエスの十字架上の姿に神の愛を見る信仰が与えられます。だからこそ、わたしたちは風のように今もここに吹いている霊の語りかけに耳を澄まし、霊の導きに委ねなければなりません。その導きの先には必ず、神の愛があります。神はこうして、父と子と聖霊によってわたしたちにご自身の愛を届けてくださっているのです。